



随筆

# 生産と文化

—オセアニア伝統音楽の場合—

山口 修\*

## 文化的な生産性

人文科学、あるいはもっと適切なことばとしては、文化科学に身を置いている私は、「生産」というと即座に「物質文化」と「事象文化」という用語を想起する。人類学者がよく使う物質文化という用語は material culture の訳語で、衣食住などの生活に利用される道具・物品・建造物などを含み、音楽でいえば楽器が重要な物質文化項目の1つである。そして物質文化とならんで社会文化（制度・政治・経済など）と精神文化（宗教・科学・芸術など）が文化全体を支えているとするのがふつうであるが、私はさらに事象文化という概念を設定している。それは音や光といった現象を人間が文化的に意味のある実体として積極的に利用するときの行動と現象の全体を指して、音楽でいえば演奏（ないし歌唱）そのものである。楽器や声を使って演奏した結果産み出される音楽は美意識や価値観に直結した精神文化の一端であるには違いないが、そのプロセスを重視するなら演奏を事象文化の1項目として位置づけるのもあながち的はずれではないだろう。

さて、楽器をはじめとして物質文化は技術をもって物と取り組んだ人間が産み出したものであるから、これがまさに「生産」の問題に結びつくことは自明の理である。ところが、これを活用した形で現出される事象文化となると、はたしてどうなのだろうかという疑問がわいてくるかもしれない。この疑問に対する解答として、私は事象文化が必然的に備えているコミュニケーションの機能がとりもなおさず「生産性」に直結するという事実を指摘したい。もちろん、

ここでは産業の分野で云々される生産性そのものではなく、それと大いに関係はあるけれどももっと広く文化全体に意味をあたえる、まさに「文化的な生産性」のことを問題にしたい。

## 物質文化としての楽器

前号で指摘したように、技術の進歩と文化の洗練が混同されるべきではないことはすでに文化科学の諸分野では基本的に了解されてはいるが、残念ながら世間一般ではあいかわらず偏見に満ちている。

たとえば写真1に見られるような丸太ん棒をほんの少しだけ加工しただけの割れ目太鼓（スリットドラム、スリットゴング）と複雑な機構と高度な工夫をこらしたグランドピアノとをくらべて、楽器の優劣を論ずることはできない。なぜならば、マーガレット＝ミードがいうように「それぞれ意味や感じ方が違う音楽」に供するための楽器であるのだから。早い話が、割れ目太鼓を打ち鳴らしたときの鋭い、それでいて重々しい響きのリズムパターンを想像してみよう。森林をつきぬけて遠くまで生の音でメッセージを伝えることはグランドピアノといえども

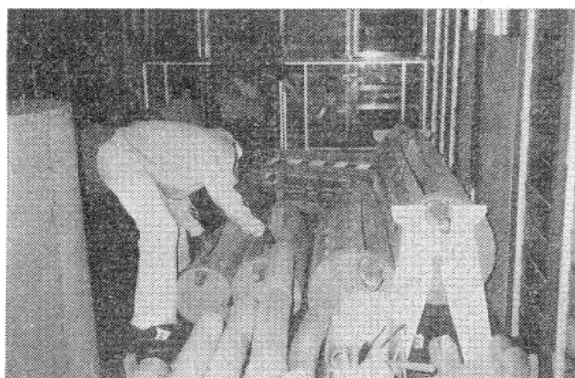


写真1 パプアニューギニア伝統楽器の割れ目太鼓セットを、音楽教育の教材として活用するトーマス＝ルンガン氏（パプアニューギニア大学附属ゴロカ教員養成大学）

\*山口 修 (YAMAGUCHI Osamu), 大阪大学, 文学部, 美学科, 音楽学講座, 助教授, M. A., 民族音楽学

不可能であるし、逆にコンサートホールの中でグランドピアノを駆使して複雑な和音や旋律に強弱緩急いろいろな変化をもたせながら非日常的な音の世界を繰り広げることは割れ目太鼓を3つ4つセットにしたところで到底およぶべくもない。

物質文化の1つの項目として世界各地で多様な形で存在する楽器は、物として眺めたときいろいろなことを私たちに語りかけてくる。適切な材料を選ぶこと1つをとってみても、おそらく先祖代々受けつがれてきた自然界についての知識にしたがって、しかるべき場所でしかるべき処置をほどこしながら選り分け、伐採するに違いない。そのとき自然界の秩序をいくらかでも乱すことに対して、あるいは人間がそうすること自体が自然のなりゆきであるかのように意味づけられるべく、儀式がとり行なわれるか、もしくは若干の畏敬の念が人間の心をよぎるであろう。伐採された丸太の性状をよくわきまえた人々は、一定期間そこに放置するなり、何らかの方法で運搬したりする。そして道具と技術を駆使した製作が始まる。やがて、1つの生命（人間）が別の生命（木）に関わりをもった証しとしてのもう1つ別の生命（楽器）が生まれる。——事実、世界の楽器の多くは人間や動物になぞらえた形をとっているし、いわば生命をもつものとして考えられてもいる。

グランドピアノが豪華な室内を飾るいわば家具あるいは美術品的な意味と価値をもつことがあるように、割れ目太鼓もまた人々の知恵と技術の産物として経済的、そして文化的価値をもっている。外部の人間が外貨をちらつかせながら二東三文で軽率に収奪すべきものではない。南太平洋の人々と私たちが関わりをもとうとするとき、私たちがしなければならぬことの1つは、自然界に人間がはたらきかける活動の産物としての物質文化の本質の一端を見てとろうと努力することである。

#### 事象文化としての音楽舞踊

コンサートホールの中でグランドピアノが奏される場合と森林の中で割れ目太鼓が打ち鳴らされる場合とを想像してみると、全く違った種

類の音楽が産み出されていることに気がつく。そうすると、世間でまことしやかに取沙汰される「音楽は万国共通の言語である」とか「音楽に国境はない」といった一見魅力的な表現が疑わしいものに思えてくるに違いない。想像をもう一步進めて、グランドピアノを熱帯の森林の中に運びこんでベートーヴェンのピアノソナタをその住民の耳に入るようにしたり、割れ目太鼓を産業社会の都会の中で打ち鳴らして近代的な人々にきかせたとしたら、それぞれの音楽が本来の意味をそれぞれの人々に投げかけることはあり得ないと考えざるを得ない。

つまり、表現をかえてせいぜい「音楽は万国共通の現象（phenomenon）である」<sup>1)</sup> くらいにしかいえない。たしかに人間が住むところどこにでも音楽らしきものはあるらしい。しかし同じく音を使った（音声）言語と似て、音楽の表現は民族や地域によって実態が違っているのである。

見方を変えれば、音楽は限定された地域の中では意味を伝えるものとしてはたらいっているという事実がはっきりしてくる。もちろん、その意味は、音声言語でもって伝達するようなメッセージに近いこともあるし、全く違った音楽固有の、いわば美的範疇に属することもある。いずれにしても、人間が楽器や声を使って音楽現象に一種のシステムをもたらすとき、それをきく人（演奏者・歌唱者自身であってかまわない）は聴取の結果何らかの反応を示すのである。

音楽をきいて楽しくなるというのはそういう反応の1つにすぎない。そういう場合には音楽は娯楽としての機能をはたしている。作業歌のリズムやBGM（バックグラウンドミュージック）のおかげで仕事の能率が上がるというのも1つの反応である。しかし音楽がもたらす人間の反応はもっと多様であるし、驚くべきことに反応のしかたの多くが文化によって異なるという事実すらある。ある音をきいて快と感じるか不快と感じるか、あるいは自分たちの音楽表現の一部となり得ると感じるかどうかといった事柄は、生まれ育った社会の中で長年の間に身につけてきたいわば後天的な類のものである。



写真2 ガダルカナルのホテルのショーに出演するキリバスの若者たち

音楽と密接な関係をもつ舞踊にしても同じである。身体の動き、身体部分が作りあげる形象の世界は、同じ人間がやることなのだからそれほど違うことはないだろうと考えられがちであるが、所かわれば品かわるもので、同じ動作をしても表現された内容、受けとめ方が違うことの方が多いようである。

それでも音楽や舞踊は他の事象文化項目とならんで当該文化の内部にあっては人々の心に訴えかけ、その結果としての何らかの反応を引き起こしている点で生産的であるといえるだろう。

#### 時間と空間をこえた文化的生産性のために

事象文化は音楽や舞踊の例からわかるように空間の中で経過する時間を文化的に意味づける人間の行動の所産であるため、その場限りののではない存在である。物質文化となると、ある程度は時間をこえて存続し得るとはいえ、それが製作・利用されるときに本来の意味を発露できること、すなわち事象文化と大いに関連をもつということを考えあわせれば、やはりそれだけではつかみどころのないものになってしまう。

国際化が日に日に進む現在にあって、政治や経済ばかりでなく、いわゆる（狭い意味での）「文化」の交流の場もふえてきている。そして経済摩擦が生じるように、あるいはその引金として、文化摩擦が異文化接触のさまざまな局面で起きやすい状態になっている。その背後には



写真3 カメハメハ学園の一室でハワイ伝統音楽のドキュメンテーションに従事するザネタ・ホオウル・キャンブラ女史

もともと同一文化内で生産性をもっていた事象文化がその民族の枠をこえて現出するときに必然的に伴なう非生産性——おたがいに理解できないこと——が余因として横たわっているように思われる。

そしてまた、同一文化内にあっては、外からの刺激（機械文明の導入など）が増すにつれ、世代間のギャップが大きくなるという問題が生じ、かつてはなんら障害なく生産性を発揮できた行動の諸相（事象文化）がかえって世代間の断絶を助長する事態にまで進んできているように思われる。日本と同じく、南太平洋の人々も悩みは同じである。

ひとつの解決策は、少なくとも音楽の分野でいえば、物質文化・事象文化そして他の文化範囲について幅広い記録と分析を行ない、急速に変化する文化のための指針を提供できるようにすることであるように思われる。こうしたドキュメンテーションは、文化内部で自分たちの歴史をたどりながらいけば文化的アイデンティティを確立するのに役立つばかりでなく、文化をこえて他の民族と心を分かちあう場を創造していくためにも必要であるに違いない。

注：(1) LIST, George (1971) "On the non-universality of musical perspectives" *Journal of the Society for Ethnomusicology*, 15/3: 399—402.